
雲と嵐～嵐視点～

嵐炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雲と嵐〜嵐視点〜

【Nコード】

N2319W

【作者名】

嵐炎

【あらすじ】

「泊まってみるか？」

野球馬鹿の持ち込んだ企画から、オレの全ては始まった…。

0 - 1 (前書き)

ヒバ獄です。

苦手な方は逃げる！

(((. . . ;)

あとかなり見にくい。

それでもいいかたは
↓

夏だ！夏休みだ！！

かつたるい学校も夏休みを迎え、今オレはとてもテンションが高い。
なぜなら…

10代目と一緒に旅行へ行くからだ！！

事の流れはこうだ。

（夏休み前）

「なあ、ツナ！獄寺！ちょっと話いいか？」

山本に呼び止められて、オレと10代目は屋上にいた。

「で、話って何？山本」「しょーもねー話だったらすぐ帰るからな」
「まあまあ聞いてくれよ。ツナ達ってここ知ってるか？」

そついうと野球馬鹿は旅行雑誌のあるページを開いた。

「『海風の宿 汐音』？」

「…あ！？」

「獄寺くん、知ってるの？」

「え、ええ…」オレは10代目にその宿の事を話した。

その宿は今、とても人気があって予約が常にいっぱいな場所であった。

「へえ…で、ここがどうかしたの？」

「泊まってみるか？」

「…えっ？」

一瞬内容を理解するのに時間がかかった。

事の流れはこうだ。

野球馬鹿の親父さんがこの宿の経営者と交友関係があるらしく、泊まりにくればと誘ってくれたらしい。

しかし、親父さんは竹寿司があるので、俺達を誘って行ってこいと云ったという事だった。

親父さん！ナイス！！
と心の中で叫んだ。

「で、でもお金が…」

「心配すんなって！今回は親父との関係もあるから、お金は気にしないでいいってさ！」

な、なんつー太っ腹…。

「面白そうじゃねーか」

そこに颯爽と現れたのは、赤ん坊にして最強のヒットマンの…

「リボーン!!」

「リボーンさん!!」

「お、小僧!!」
だった。

「っておい!!リボーンさんをそんな風に呼ぶなっ!!」

「まあいいじゃねーか」

「面白そうだな。ツナ。行つてこい。」

「で、でもお前、また何か仕掛けるつもりだろ?」

た、確かにそんな感じもしなくもない…。

でも次の言葉には驚いた。

「いや、今回はなんもしねえぞ。」

「えっ!？」

3人同時だった。

珍しい。あのリボンさんが何もしないなんて。

「ただしだ。」

あ、やっぱり。

「雲雀とクロームも連れてこい。」

「ええええええ?!」

これも3人同時だった。

にしても無茶だ！クロームはまだしも、雲雀は無理に決まってる！

「無理だよ！！群れるのが嫌いな雲雀さんが来るわけない…へぶっ
！！」

リボーンさんの見事なパンチが10代目に当たった。

「連れてこないとどうなるか分かってるだろ…？」

ニヤリと笑うリボーンさん。
おお、怖い。

「あ、やべ。」

時計を見た野球馬鹿は駆け出した。

「おい。どこ行くつもりだ、てめえ。」

そう言っただけはダイナマイトを片手に持った。

「い、獄寺くん！ストップ！！山本、どうかしたの？」

「わりい。店の手伝いあるんだ。」

「ちっ」

「そっか。頑張つてね」

「ツナ。とりあえず行くってことでいいか？」

「え、あ、うん…」

「じゃ、来週あたり行こうぜ！」

で、1週間後、つまり今日に至る。

しかし、もし仮に雲雀が来たと考えてみる。

〔獄寺想像〕

「赤ん坊に呼ばれたから来てみたけど…気が変わったよ…。
ここにいる全員…」

…咬み殺される…！

ダメだ、やっぱり雲雀は来てはいけない！

でも来なかったとしたら…

〔獄寺想像〕

「なんだ。集まってねえじゃねえか。じゃ今回はボンゴレ式サバイバルトレーニングだな…（にや）」

どちらにせよイヤだ！！

ああああ…だんだん行きたくなってきた…。
もう帰ろうかな…。

そんな時だった。

「ごめん！お待たせ！」

この言葉を聞いたとたん絶対行こうと決めた。

そつだ。雲雀が来ようが来なかつが、オレの知つたこつちやねえ。

何てつたつて…

10代目と旅行に行けるんだから！！

「さあ行きましよう！10代目！！」

「う、うん！」

（10分後）

「ごめん！待つた？」

「お、やつと来たか！」

待ち合わせ場所である並盛駅に着いた。

さて、誰がいるか確認してみるか。

まずは10代目。

次にオレ。

野球馬鹿。

んで、クローム。

おお、クローム来たか。

で、なぜかイーピン。

たぶんクロームだけだと女1人になるからだろう。

そして雲雀つと…。

…ん？雲雀？

もう一度確認してみた。

まずは10代目。
次にオレ。
で野球馬鹿。
そんでクローム。
んでイーピン。

そして…雲雀…。

ひ、雲雀！？

おい、嘘だろ！？あの雲雀が何でここにいるんだ！？

「良かった！来てくれたんですね！！」

「別に君のためじゃないよ。僕は赤ん坊に呼ばれたから来たんだ。勘違いしないでくれる？」

なる。

さすがの雲雀もリボンさんにはかなわないんだな。

「クロームもイーピンも来てくれてありがとう」

「こちらこそありがとう…ボス…。」

「ツナさん、謝謝！」

さすが10代目…！

やっぱり10代目はすごいお方だ…！

「全員揃ったな。よくやったぞ。ツナ。」

ちなみに芝生頭は家族旅行でいない。アホ牛は夏風邪引いてダウン。

野球馬鹿がいるのが気に食わねえが、今回は企画を持ち込んできたから、特別に見逃してやってる。

「間もなく3番線に…」

アナウンスが流れる。

「おっ、そろつと来るみてーだな。」

「じゃ、行こっか!!」
「イエーイ!!」

「ふん。」
「あ…。」

こうしてオレと10代目とその他いろいろの楽しい夏旅行が始まった!!

…はずだった。

第1章 始まり（前書き）

前回まではプロローグでした。
第1章、始まります！

第1章 始まり

「すみません！！10代目と一緒にいれなくて…！」

「いや、あやまなくていいよ。そんな…」

10代目の右腕としてそばにいないけれども、いられなくなつたのには訳がある。

それは電車の中での事だつた…。

〈移動中…〉

「はい！みんな注目！！！」

10代目がそう言うと、手には4本の割り箸があつた。

「旅行という事なんで、くじでペアを決めようか！」

クロームとイーピンは女子という事で、すでにペアになっていた。

で、残りの俺達のペアを決めようかという事だった。

「みんな持った？いくよ！せーのっ…！」

オレは赤だった。

10代目はもちろん赤のはずだ！

「10代目！何色でしたか？」

念のために聞いてみた。

「えっとね…」

だがしかし10代目が言った言葉によって、オレの理想は儚く崩れさっていった…。

「オレは青だよ」

ぬあにいい！？Σ(。□。；)
(；)

「あ、そうでしたか…」

いや、まだまだだ。
野球馬鹿ならまだマシだ。
まだ光はある！！

「おい、お前何色だ？」

頼む！！赤って言うてくれ！！（・・・）

「おっ、ツナと一緒にだ！」

…ジ・エンド・オブ・俺…！

「ぬああああ…！」

…そして現在…

「まあがっかりすんなって。部屋が一緒なだけなんだし。な？」

オレは一番なりたくなかった奴となった…。

「ご、獄寺くん…大丈夫？」

「いえ、全然…」

こうして10代目と…じゃなくて…

オレとアイツの地獄旅行が始まった…（
；
；）

……これが全ての始まりになるとは知らずに。

青い空！

青い海！！

とにかく真つ青な景色が目の前に広がっていた。

「スゲー……！」

さすが『海風の宿』という名の通り、風が気持ちいい。野球馬鹿の親父さんに感謝だ！！

「獄寺くん、行こう！」

「勿論です！10代目……！」

いつもは日に焼けないためにパラソルから出るのはいやだけど、今は気にしなかった。

雲雀と一緒にいると、色々と気まづいから……！

それからしばらくしてから、休憩するために一度パラソルに戻った。

すると雲雀がこっちを見てきた。

え、オレ何かしたっけ？

ずっと見ている。

え、ちょ、ええ？！

オレ何か変な事したか！？

すると雲雀は上に着ていたパーカーのポケットから何かを取り出した。

ヤバイ！何かやられる！！

「ねえ」

「は、はひい！？」

色々パニックだったからか、アホ女ぽくなってしまった。

「使えば？」

そう言つて雲雀は何かをオレに投げた。

何だ？

「これ……」

それは保冷剤と日焼け止めクリームだった。

「何だよ、これ？」

「日に焼けたくないんだろ？」

あ、つまり保冷剤でクールダウンさせて、クリームをつけろって事か？

「あ、ありがとな……」

あれ、意外に優しい？

今までパニックだった脳内がやっと落ち着いた。

どうしょ、誘ってみるか？

「な、なあ雲雀」

「何」

「お、お前も一緒に…」

すると雲雀の背後から何かを感じた。

「ワオ…群れるのが嫌いな僕にそんな事を…」

ヤバい。この後なんて言われるか想像ついた。

「…咬み殺すよ?」

ですよー(。(;!!

「だよな!じゃ!」

そう言ってオレはすぐにその場から逃げた。

一瞬雲雀を優しいと思ったオレが甘かった。

やっぱり雲雀は…

恐ええええ!!(。(;

1 - 1 (後書き)

8月も終わるつてのに、夏モード満開だな？

1 - 2 (前書き)

いきなりの展開です。

結構頑張ったつもりです。

どうか温かい目で見てください……
(;)。

1 - 2

そうしてオレは10代目やイーピン達と一緒に遊んでいた。

「10代目。オレ少しあそこの岩場で休めますね」

「うん、分かった」

そう言ってオレは岩場に行った。

「お、やっぱりここからの景色サイコーだな」

実はここに到着してからずっとこの岩場に行きたくてウズウズしてたんだよな。

オレは鼻唄を唄いながら休憩していた。

その時だった。

「獄寺くん!! 危ない!!」

10代目がそう叫んだ。

「え?」

「後ろ！！早く逃げ」

10代目が言いかけた時だった。

いきなり後ろから大きな波がきて、オレのいた岩場を襲った。

ざぱーんっ！！

…それ以降の記憶は覚えてない。

たぶん海に押し出されたのだろう。

でも1つだけ感じたんだ。

唇に何か柔らかいのが触れたのを…。

「ん…」

オレは目覚めた。

ここは一体何処だろう。

一番最初に視界に入っ たのは

クロームだった。

「ボス… 起きた…」

クロームが報告すると

「獄寺くん!!」

10代目の声が聞こえた。

「10代目…申し訳ありません…」

「ううん！それより無事でよかった！！」

「お、起きたのな」

野球馬鹿の声が聞こえた。

「にしても凄かったのな。大きな波がどばんのぼーんっ！！で」

いつもは分からないアイツの擬音会話も今回はなんとなく分かった。

「それに雲雀がたす…もがっ！」

10代目は慌てて野球馬鹿の口を塞いだ。

「雲雀が…どうかしたんすか？」

「ううん！何でもない！！」

10代目は慌てた様に言った。

「…嵐の人…大丈夫？」

「あ、ああ。心配かけたな」

珍しくクロームに話しかけられたから少し戸惑った。

「入るよ」

あ、あの声は…！

「雲雀さん！」

雲雀が部屋に入ってきた。

雲雀はオレを見て少しホッとした顔を見せた。

「な、何だよ」

「別に。無事だったんだなと思っただけ」

え？

「雲雀も心配してたのな」

野球馬鹿がそう言った。

「…仮にペアだし」

雲雀が呟いた。

ちょっと嬉しかった。

今日は雲雀を避けたような行動しかとってなかったから、心配されなくても文句は言えなかった。

でも…心配してくれた。

「わ、悪かったな…」

雲雀に言った。

「君のせいじゃないでしょ。波のせいなんだから」

ヤバイ。どうしよう。

すっげー嬉しい。

すると雲雀は枕元に何かを置いた。

「…着替え。適当に持ってきたから組み合わせの文句はなしだよ」

雲雀が持ってきた組み合わせを見ると、オレが決めていた組み合わせと全く同じだった。

「…ありがとう」

オレは思った。

雲雀って意外に優しい。

少し胸がドキッとした。

1 - 3 (後書き)

よくよく思うとリボーン出てきてないなw w

まあ邪魔はしないと言いましたし。

旅行中は出てきませんよw

1 - 4 (前書き)

獄寺のパニック劇場 W W W

頭の中で想像しながらご覧ください
↓

夜。

オレは今、自分たちの部屋にいる。

雲雀は部屋についてた露天風呂に入っている。

…つか露天風呂って。

普通に泊まってたら相当な額がかかるんだろうな。

改めて親父さんに感謝。

がらっ。

雲雀が風呂から上がったらしい。

「ただいま」

た、ただいま？

風呂から上がっただけで？

ま、まあアイツなりにはただいまなんだろう。

「…おかえり」

そう言おうとして雲雀を見た。

色々と眩しすぎました。

「ちよ、おま、ゆか…！」
(ちよ、お前浴衣が！)

眩しすぎて言葉が出ない。

雲雀は頭に？マークを浮かばせている。

オレは布団にうずくまった。

やべえ。

風呂上がり姿、破壊力半端ねえ…。

「どうしたの」

雲雀がいた。

「なっ…!!」

近い!!近すぎる!!

距離何センチだよ!!

オレにとって眩しすぎたモノ。

それは

雲雀のほだけ姿でした。

つか近い！！

雲雀の顔が見れないので視線を真っ直ぐにすると

はだけた胸があつた。

「はひいいい！？」

そう言つてオレは後ろに退けぞつた。

またアホ女みたいな声出してしまった！！

申し訳ありません！10代目！！

同性のほだけ姿に異常に反応するなんて、オレは右腕失格です！！

「ねえ」

「何だよ!!」

顔を上げた瞬間

ごんっ

頭を強打した。

「~~~~~っ!!」

いてえ!!

オレはその場にうずくまった。

雲雀はきょとんとしている。

「…あのさ…」

「何？」

「…頼むから、ちゃんと浴衣着てくれ…」

すると雲雀はやつと分かったらしく、浴衣を直した。

「…もしかしてさ」

「な、何だよお…」

「今までずっとさっきのに反応してたの？」

いつものオレなら

「そつ、そんなわけねーだろー!!」

とか言っただろうけど…

今のオレには、そんな氣力がなかった…。

「…だつたら悪いかつ」

雲雀はまたきよんとした。

そして…

笑った。

「な、笑う事ないだろ!？」

急に恥ずかしくなった。

「つ、つーかお前が悪いんだよ!…!…!」

雲雀はずっと笑っていた。

「いめんめん、面白くて…」

…ん？

つーかよくよく考えたら雲雀って笑った事あったっけ？

もしかして、アイツの事初めて笑わせたのって…

オレ？

その事に関しては嬉しかった。

けど。

笑いの対象がオレの異常な反応だった事には…

少しムカついた。

でも

雲雀の笑った顔って滅多に見れないよな。

雲雀はまだ笑ってる。

…もうどうでもいいや。

そしてオレも笑った。

~~~~~

「ねえ」

「何だよ」

雲雀はオレにアイスを差し出した。

「笑いすぎたお詫び」

イチゴ味のダッツだった。

「…ふん」

もらってやった。

食べようとした時、思い出した。

「ってこれ、オレが買ってきたヤツだろーがあー!!」

「あ、ごめん」

そう言って雲雀は微笑んだ。

ったく…。

ん？

何だこのキュンキュンは！！

オレは必死にキュンキュンにもだえていた。

くそっ…。

オレはいつの間に雲雀に対してこんなに弱くなったんだよ…！

1 - 4 (後書き)

これは雲雀のせいではない。

私のせいだwww

ある意味妄想爆発の話でしたwww

## 115 上（前書き）

ついに獄寺が真実を知る。

長いので上下に分けました。

## 115 上

二日目。

特に今日は予定もなく、何かあったかと聞かれたら野球馬鹿とクロームと一緒に出かけたという事だけだ。

にしても珍しいペアだな。

昼間はずっと10代目の部屋にいた。

べ、別に雲雀を避けてるわけじゃないからな？

ただ単に10代目と居たかったから行っただけで。

そんな時だった。

「…獄寺くんさ」

「何です？10代目」

その時の10代目はなぜか複雑そうな顔をしていた。

「…どうかなされましたか？」

「…あの時の事、覚えてる？」

あの時？

海の事だろうか。

「いえ…何も」

「じゃあさ、何か感じなかった？」

「…何か柔らかいのが唇に触れた様な気がしなくもないですが…」

10代目の様子がおかしい。何かあったのだろうか。

「…それがどうかしましたか？」

10代目は少し黙ったあと、オレに言った。

「…ごめん。オレ嘘ついてたんだ」

「…は？」

嘘？

「獄寺くんが目覚めたとき、オレが助け たって言ったじゃん？」

「は、はい…」

「あれ…嘘なんだ」

…え？

「じゃ、誰がオレを…？」

10代目はまた黙った。

そして真剣な眼差しでオレを見ていた。

「…獄寺くん。今から言うことに驚かないでね?」

「え、あ、はあ…?」

そして40分後…。

「…誰にも言わないでね」

「はい。失礼します…」

10代目の部屋の扉を閉じる。

そしてすぐさまトイレに行った。

ばんっ!!

どうしよう。信じられない。

すごく胸が苦しい。

まさか

まさか雲雀が

オレを助けたなんて。

唇に指を当てる。

あの柔らかいのが

雲雀の…唇？

申し訳ありません。10代目。

あなたが教えてくれた真実。

寂しいどころか

逆に嬉しいです。

すごく胸が高鳴っている。

ドキドキが収まらない。

嬉しい。

けど。

すごく

すごくオレが許せなかった。

助けてくれたのに。

人工呼吸までしてくれたのに。

雲雀にすごく申し訳なかった。

一体どんな想いで10代目にあんな事を言ったのだろう。

オレが雲雀の立場だったら

すごく辛い。

涙が、止まらない。

ごめん。ごめん、雲雀。

最初から避けててごめん。

オレが旅行に行くから、お前は群れるのをわざわざ我慢して来てくれたんだね。

お前がオレとペアになった時、たぶん嬉しかったんだろうね。

保冷剤と日焼け止めクリームを貸してくれたのも、オレの事を心配してくれたからなんだね。

なのに

なのに…！

オレは全てを拒んでいた。

オレがあの時、いやな顔をしたとき

お前はどんな気持ちだっただろう。

オレはお前を分かっていなかった。

ずっとオレと居ることを嫌だと思い込んでいた。

ごめん。

本当にごめん。

オレはお前に合わせる顔がないよ。

115 上(後書き)

ヤバイよ。

書いたあとに読み返したら、危うく泣くところだったよ？

すいません。

かなり長くなるので上中下にしました。

今回は「…」の数がすごく多いです？

謝らないと…だよな。

でもさっき合わせる顔がないと思ったよな。

…どうすればいいんだ？

「…獄寺隼人？」

…雲雀！？

「何やってるの？そんな所で」

「べ、別に…」

「…泣いてるの？」

何で分かるんだ！！  
エスパーか！？アイツは！

「…泣いてるわけないだろ」

「にしては声がいつもと違うような気がするけど？」

「…っ！」

「…何かあったの？」

「…すみません、10代目。」

少し約束破ります。

言おうとした時だった。

「ねえ、ここ開けてよ」

「！…やだ！」

「冗談じゃねえ。」

こんな顔見られたくねえよ。

「…まあいい。そんなにいやならそれでいいよ」

「…あ…」

もしかしてオレ

また雲雀を傷付けた？

「…あつ…」

ずるずると腰を落とした。

「…何？一体…」

また涙が出た。

「…っ…」

言うんだ、オレ。

今なら言えるだろ？

雲雀の顔を見てないんだから。

オレは泣きながらも言った。

「…ごめん」

「…は？」

「…10代目から…話…聞いた」

「…何の？」

「…お前…オレが旅行に…行くなって…聞いたから…来たんだろ？」

「…え？」

「…ペアになった時…嬉しかった…んだろ？」

「…そうだけど？」

「…日焼け止め…クリーム…とかも…オレの事…心配…してくれたから…だろ？」

「…そうだよ」

「…なのに…オレは…」

「…オレは？」

「…全部…拒んだ…」

「…」

「…きつかったよな？」

「…正直…ね」

「…オレ…てつきり…」

「…？」

「お前…オレと居ることを…いやだと…思い込んだ」

「…え…」

「だから…この事を…10代目から…聞いた時…」

「…時？」

「…嬉しかった…」

「…!!」

「…でも…その分…」

「…許せなかったんだろ？自分が」

「…え？」

「だから僕に申し訳なかったんでしょ？」

…何で…？

「…何で…分かるんだ？」

「君ならそう言つと思つたから」

「…そう…か」

「だから…」

「？ だから…？」

「この後…めんどくわないでよ？」

…え…？

その瞬間だった。

ガチャッ

「!？」

いきなり雲雀が入ってきたのだ。

「な…!？」

何でだ!？カギは閉めたはずなのに!!

「こういうカギって10円玉で開けられるんだよね」

すると雲雀はオレの手を掴んだ。

「みつ、見るな…!」

そして抱き寄せた。

「…ひば…？」

「君の顔は見ないよ」

え？

「たぶん相当な時間、泣いてたんだろ？そんな顔見られたくないでしょ？」

「あ…」

「…一旦部屋に帰ろう。続きはそれからだ」

115 中（後書き）

しかし一通り読むと、獄寺がかなり乙女路線だなww

ま、乙女座だしww

115 下(前書き)

続き。

何か最初らへん意味不明。

どうぞ  
↓

今、オレは部屋にいる。

雲雀はオレを見ないで部屋へと連れていってくれた。

「落ち着きなよ」

と言ってお茶も出してくれた。

…優しい。

「…で、話の続きだけど…」

なに言われんだろうか…。怖い。

「…ありがとう」

…え？

「…最初はただの厄介にしかならないと思っていたんだ。まさか誰も来るとは思っていない奴が来たようなもんだし」

た、確かに…。

「特に君なんかはそうでしょ？自分が慕う10代目（沢田綱吉）との旅行のほがイヤな奴との旅行になったんだから」

「…それは…違う」

「…え？」

「もし10代目からあの事を聞かなかったらそうだったかもしれないけど…」

「今は…嬉しい」

「って何言ってるんだ！？オレ！  
すげー恥ずかしい！！」

「…そう」

雲雀は優しい目で微笑んでいた。

「君がそう思ってくれるなら、僕は嬉しいよ」

…何か照れるな。

「それより…」

そう言うと雲雀はオレが顔を見られないために被っていたタオルを取った。

「っ…!？」

何だよ！見ねーって言ってたじゃんか！！

「か、返せよ!!」

するとまた抱き寄せた。

「な、雲雀!？」

「ごめん」

え…？

雲雀はオレの目尻に溜まっていた涙を拭った。

「な…!？」

「…相当泣いてたんでしょ？目の下かなり赤いよ」

「…あまり見るなよ」

顔を慌てて伏せる。

「いやだ」

伏せた顔を無理やり上げられた。

「…おまつ…」

「僕の事で泣いてたんでしょ？だから…」

「本当にごめん」

「あ、謝るなよ…」

微妙に焦るだろうが！

あの雲雀が謝るなんて…！

「それと」

へ？

「…あ…ありが…」

「ありが…」と…」

！！？

雲雀が照れた！？

「ぷっ」

「な、何？」

「あははは…！」

「わ、笑うなよ…！」

ごめん。雲雀。

これをお前に言ったら瞬殺されちまうから言わねえけど

スゲーかわいかった。

「…さて」

「? どうした?」

すると和やかだった雰囲気が一気にどす黒くなった。

「ひ、雲雀…?」

「黙っていると言ったのに約束を破った人を咬み殺しに行かないとね…」

そ、それって…

10代目の事が!?

部屋を出ようとした雲雀を呼び止めるために、オレは走った。

「ま、待て! ひば…」

ツンッ

しまった!!

浴衣踏んじまった!!

「おわっ!!」

ドテンッ

…てあれ? 痛くない?

「…まったく君って本当におっちょこちょいだね…」

…ん?

雲雀？

…てまさか！！？

下を見る。

「のわあああつ！！」

何か色々すいません！！

「わ、悪い！すぐどく！！」

「…いや、この際これでいいよ」

「いやいやオレが良くねえっつの！！」

だってこの状況を一言で言うならや

地元最強の不良委員長を小動物が襲ってる。

みたいなさ!!

いや？襲ってはないか…。

つか自分の事小動物って言っちゃったよ!!

てか色々とヤバい状態なんだよ!!

「で、何か言おうとしてたよね？」

何気に嬉しそうな顔してるし!!

ああ…もうこの際いいや。

「…今回の事はオレが無理やり聞いたりしたようなもんだからさ…。  
10代目の事は咬み殺さないでくれないか？」

「ワオ。君が？」

「…だったらオレを咬み殺しても文句言わねえ…」

…て変な意味で捉えんなよ！？

10代目の身代わりの的な意味で言ったんだからな！？

「…じゃあ咬み殺さない代わりに1つ頼んでいい？」

「な、何だよ？」

雲雀はにやりと笑った。

「今までずっと君の事、獄寺隼人とか君とかで呼んでたでしょ？」

「？…ああ」

「これから隼人って呼んでいいかい？」

「え…ってええええ！？」

どついう頼み事だよ！！

で、でも…

実は呼ばれたいとかって思ったり…

思わなかったり…。

「…分かったよ」

「…ありがと。隼人」

そう言つて雲雀は微笑んだ。

…申し訳ありません。10代目。

オレ…

少しだけ雲雀の事

…意識してもよろしいでしょうか？

115 下（後書き）

や、やっと終わった…！

長かった…！

後半らへん、頭の中がパラダイスだったよ（＾q＾）

## 1-6 上(前書き)

いよいよ第1章ラストになります!!

今回も上中下のつもりでいます。

ではどうぞ↓

116 上

三日目。

ついに今日で旅行が終わってしまつ。

10代目と楽しい旅行のはずが、雲雀との気まずい旅行になってしまった。

でも

もう気まずいなんて思つてない。

むしろ

雲雀とで良かった様な気がするんだ。

…なんてアイツには言えるわけない。

オレはあくまでも10代目の右腕。

最後ぐらいは10代目と一緒にいたい。

…けど

最後まで雲雀と一緒にいたいとも思ってしまう。

どうすればいいんだ…？

「…くん」

「獄寺くん？」

「えー？あ、何ですか？10代目」

しまった！ずっと考えてて気づかなかった！！

「これからペア決めのくじするからちよつと来てくれない？」

「あ、はい」

つてええええ！？

またくじ引きでペア決めるのか！？

また10代目と一緒にになれる確率が減ったー！！

…いや、でも

雲雀と一緒にいれる確率が出たって事か…？

…嬉しいんだか悲しいんだか…。

「みんな持った？いくよ！せーのっ…！」

オレは紫だった。

今回は誰にも聞かない事にした。

野球馬鹿は…クロームとか。ま、オレには関係ないか。

イーピンは…10代目とか…。

…え、10代目と？

つまり…これって？

「  
…紫？」

声のする方へ振り返る。

「「あ…」」

「雲雀…」

「隼人…」

「…また一緒だね」

「…だな」

「…行こうか」

「…ああ」

最後まで雲雀と一緒にいた。

10代目には悪いけど

すごく嬉しい。

「じゃ、またここに集合な！」

それぞれペアになって水族館に入っていた。

「獄寺くん！」

「10代目？」

「…また雲雀さんと一緒なんだね。代わろうか？」

「いや、大丈夫ですよ」

「でも…」

「それに…もう雲雀の事、気まずいなんて思っていないですから」

「…そっか。いってらっしゃい」

「はい！いってきますー！！」

こうして雲雀との旅行での最後のイベントが始まった。

雲雀が館内マップを広げる。

「どこ行く？」

実はこの水族館、遊園地もあるらしい。

なので家族やカップルには凄く人気があるのだ。

「結構時間あるし…とりあえず水族館みて、遊園地行くか？」

「いいよ。じゃ行こうか」

~~~~~

「「「おー…」」」

目の前にはでかい水槽があって、優雅に魚が泳いでいた。

「でけーなあ…」

カシャッ

ん？

「雲雀、今何か撮らなかったか？」

「… 亀撮った」

「ふーん… じゃオレも撮ろうかな」

携帯のカメラを水槽に向ける。

… 撮りにくいな。

カシャッ

「… 何撮ったの？」

「あ、あれ。イワシの群れ」

あー… 危なかった。

まさかバレたかと思っただぜ。

ホントはイワシの群れなんか撮ってない。

撮ったのは

水槽を眺めていた雲雀。

… 10代目にバレないように後でSDに写しとこつ。

「ねえ、次行かない？」

「お、おう」

…ふと思っただが

水族館ってかなり群れてるよな…。

雲雀…大丈夫か？

「なあ、雲雀」

雲雀を見る。

「…な、何？」

わあ、何かすごい頑張って我慢してる…！

「だ、大丈夫か？」

「…大丈夫じゃない」

だよな！群れが嫌いだからな！

「…でも我慢しとかないと…」

「隼人との最後のイベントが台無しになるだろ？」

って恥ずかしいなおい!!

「…あ、あんま無理すんなよ？休みたくなったら言えよ？」

「…うん。ごめん」

…ああー…

雲雀と一緒になれたのは嬉しいけど…

心臓がもたないような気がするな…。

~~~~~

「…かわいい…！」

アシカかわいいな！

何か見てて癒されるっつか、ほんわかする…！

「アシカ好きなの？」

「大好き…！」

「へえ…あ、こっち来た」

「マジか！…どこ！？」

雲雀を見た。

「…うおおお！！」

雲雀の所になぜかアシカがたくさんいるう！！

「…隼人…」

「何？」

「…近くないか？」

「アシカとか？こんなに近いのはめったにないぜ？」

「いや…アシカじゃなくて…」

？ 何が？

「…隼人との距離が…」  
え？

肩が触れていた。

「はひ！？」

またアホ女が出た！！

「悪い！気づかんかった！！」

「…いや…」

珍しく雲雀の顔が赤かった。

…お前の方がかわいいと言ったら、瞬殺決定だな。

~~~~~

今オレは非常に珍しい状況を目撃している。

全てのペンギンが雲雀の所に集まっているのだ。

「…動物に好かれてんな、お前」

軽くム力ついた。

オレなんか瓜に全然なつかれないのに…！

ペンギンの餌を買っていたので呼んでみる。

「ほら、餌だぞー」

無反応。

ちくしょー！！ムカつくな！！

「一人で何やってんの？」

雲雀がこっちに来た。

あ、まさかこの流れでペンギンこっち来るか！？

するとペンギンは解散してしまった。

「あれ……」

そして他の人があげている餌の方へ行ってしまった。

オレの中の何かが切れた。

「……そうか……」

「？ 隼人？」

「…そうかそうか…オレは餌以下か…」

「は、隼人…？」

「いいよなー雲雀は…そんなに動物に好かれて…」

オレく餌く雲雀か…。

「と、とりあえず落ち着け隼人。ほ、ほら餌投げてみれば？」
投げてみる。

何にも来なかった。

「あ…」

「…だよな…」

「で、でもさっきのは偶然だからさ」

「…じゃオレから離れてみれば？」

雲雀がオレから離れる。

一気にペンギン大集合。

…ジ・エンド・オブ・オレ。

「あ…え…と」

焦る雲雀。

ああ、もう泣きたい…。

「！！ 隼人！下！」

下？

するとそこには小さなペンギンがいた。

「…！！」

あまりの感動に言葉が出ません…！

「…良かったね」

ありがとう。ペンギン。この事は絶対に忘れません。

116 上(後書き)

今やふすぎるけど、じっくんおめでとつじないました???

116 中（前書き）

水族館から遊園地へと変わります。

ある程度見てどうしようか迷っていた。

「どうする？遊園地行くかい？」

「オレはいいけどよ、遊園地ってかなり群れてないか？お前大丈夫かよ」

「…今まで我慢できたんだ。きっと大丈夫だと思う」

「あ、あまり無理すんなよ？」

行こうとした時だった。

きゅっううう…

…？ 何だ？今の音。

「雲雀、今何か聞こえなかったか？」

返事がなかった。

「雲雀？」

振り向くと雲雀がうずくまっていた。

「おい、どうした？気分悪いか？」

「…の音」

「へ？」

「今は…腹の音だ」

「腹…？」

「…もしかして？」

「お前…腹減ったのか？」

きゅっううう…

「…！！」

雲雀の顔が赤くなる。

「…お前の腹は正直だな」

「うるさいな…」

顔をそらした。

すごく照れてる…。

「…かわいいな」

「？ 今何か言った？」

「いや、何も」

しまった、思わず口にしまった。

…雲雀って意外に照れ屋？

そう思うと自然に笑ってしまった。

「…じゃ、先にメシ食うか？」

「別にいいよ。平気だ」

「腹減ってるんだろ？」

きゅっうっう
…

「…からかうな！」

「あははは！…ホントに正直だな！」

ヤバイ。

今日の雲雀

メチャクチャかわいい。

~~~~~

腹ごしらえも終わった。

「じゃ行くか！」

やはり夏休みという事もあってか、かなり混んでいた。

「雲雀、乗りたいのあるか？」

「…あれ」

雲雀の指先を見ると…

「きゃあああ…！！」

「…絶叫系好きか？」

「嫌いならいいけど」

「嫌いじゃねーけど、食べたあとだからどうかと思って…」

「大丈夫でしょ。行こう」

「ええー…」

よほど乗りたいんだな。

いつもより顔がワクワクしている様に見える。

~~~~~

「隼人は何乗りたいの？」

「…そろつと時間もアレだし、観覧車乗りてーな」

オレがそう言った後、雲雀の顔が曇った気がした。

「雲雀？」

「いや、何でもない。行こうか」

…？ 何か変だな…。

~~~~~

「くあー！いい景色だったな！雲雀」

返事がなかった。

「雲雀？」

横を見た。

…何か変だな。

「…どうかしたのか？」

そう言って肩に手を置いた。

その瞬間

「うおっ！？」

雲雀が倒れた。

オレの方に倒れてきたから、何とかキャッチはした。

「…ううゝ…」

「大丈夫か？」

と、とりあえずどこかに運ばないと…。

~~~~~

…どうしよう。

運んだはいいけど

膝枕しちゃってるよ!!

ああああ…! あん時は焦ってたから気にしなかったけど、何かすごく…!

「…う…?」

あ、雲雀起きた。とりあえず平常心を装え、オレ。

「…隼人？」

「起きたか。大丈夫か？」

すると雲雀は膝枕に気づいたらしく、

「…ごめん。すぐ起きる」

「いや待て、無理すんなよ。寝てていいから」

…いや、寝てていいからと言ったけどオレあんま良くねー！！

「何か乗る前から暗かったよな。何かあったか？」

「…実は…」

「…観覧車苦手なんだよね…」

何い！？

「嫌なら早く言えよ、そういつとは…」

「…うめん」

「…高い所はあんまり好きじゃないんだ…」

「ジェットコースター平気なのにか？」

「アレはすぐ落ちるから…」

「屋上は？」

「あそこは別だよ」

「ふーん…」

意外だな。

雲雀にも苦手なモノってあったんだ。

何でも小さい頃に3階から落ちそうになったらしく、それで降高い所はあんまり好きじゃないらしい。

3階から落ちそうになったなら、分かんなくもねえな…。

「何で言わなかったんだよ」

「だって…」

「だって？」

「隼人は僕が乗りたかったのについてきてくれただろ？」

「そりゃそうだ。ペアなんだし」

「だから…」

「隼人が乗りたいて言っただから、たとえそれが自分の苦手なモノだったとしても乗らないといけないと思って…」

…何かドキッとした。

オレのためにわざわざ苦手なヤツに乗ってくれたなんて…。

「…悪かったな」

「隼人は悪くないよ。悪いのは僕だ」

そう言っつて雲雀は起き上がった。

「ありがとう。ずいぶん楽になったよ」

「そうか…。良かった」

…もうちょっと寝てて欲しかったかも…

なんて。

116 中（後書き）

雲雀さんの観覧車の話は、雲雀さんの声の方の実話ですので。

にしても雲雀さん、照れまくってましたね…？

116 下(前書き)

いよいよラストです!!
いやぁ長かった…!!

そうして楽しい時間はあっという間に過ぎていった。

「よし、全員集まったね。帰ろっか！」

ああ、もうすぐ終わってしまう。

…神様。

どうか…お願いがあります。

少しだけ。少しだけでいいから。

時間を…止めて。

3日間ずっと雲雀といた。

色々あった。

けど

その分、とても充実していたと思えるんだ。

まだ

まだ帰りたくない。

もっと

もっと雲雀と居たい。

けど

時間は止まらない。

並盛へと走る電車の中で窓から夕陽を見た。

ああ

戻りたくない。

並^ふ盛^つに戻りたくない。

そんな思いを抱えて

オレ達は並盛へと戻ってきた。

~~~~~

「あーっ、楽しかったなー！！山本！ありがとうー！」

「楽しんでもらえてよかったのな。あ、この後親父が寿司食いに来ないかって言ってるから皆で行こうぜ？」

「いいの！？行こう？みんなー！」

「僕はいい」

「あ…そうですね。わざわざ群れるのを我慢して来てくれたんですからね…」

「じゃ」

「ありがとうございましたー！」

どうしよう。

雲雀が帰ってしまう。

「じゃ獄寺くん、行こっか」

「…すいません、10代目…」

「？ 何？」

「…オレも帰らせてもらっても…いいですか？」

「え…」

すいません！本当に申し訳ありません！！

自分勝手な行動を、どうかお許し下さい…！！

「…いいよ。いつてきな」

「え…」

「じゃ、またいつかね!」

そう言つて10代目は離れていった。

10代目。

本当に申し訳ありません。

あなたがくれたこのチャンス。

決して無駄にはしません…!!

そしてオレは走り出した。

~~~~~

どれくらい走っただろう。

かなり息が上がっている。

でも走る。

最後に

最後に1つだけ

雲雀にしないといけなことがあるんだ…!!

どうか…！

どうか最後に

雲雀と会えますように…！！

…見つけた！！

「雲雀いいい！！」

驚いた顔で雲雀が振り向く。

「…隼人！？」

「…はあ…はあ…」

「…どうしたの？そんなに慌てて…」

「…こ…これ…」

そう言っつて雲雀にあるものを渡す。

「…？ 何これ…」

「用はそれだけだ。じゃな」

「え、ちよつとまつ…」

すぐにオレはまた走り出した。

…「んぐらいでいいよな。」

ある程度走ったオレは歩くのに変えた。

…実は水族館で買っておいたんだよな。

夏休み明けまで会えなくなるなら…

…これぐらい、いいよな？

こうして旅行は終わった。

全ては始まっていた。

116 下（後書き）

第1章、完結！！

次から第2章に入ります！！

第2章 戸惑い（前書き）

第2章、始まります！！

これからかなり季節がずれると思いますけど、どうか宜しくお願いします。

第2章 戸惑い

雲雀との旅行から1ヶ月が過ぎた。

夏休みも終わり、またいつもと変わらない日常が始まった。

… やつと雲雀に会えるな。

そう考えると心が少し弾む。

「…くん？」

「獄寺くん！」

「あ、10代目！？」

「何かあったの？嬉しそうな顔してたよ」

「い、いえ何でも…」

「そっか。次移動教室だから行こっか」

「はい」

最近10代目には申し訳ない気持ちで一杯だ。

オレは10代目の右腕なのに…

10代目と居るときはいつも雲雀の事を考えてしまっ

…いつの間にこんなになってしまったんだろう？

ドンッ

「あ、悪い」

そう言っ

「何だ、隼人か」

いつもの格好をした雲雀がいた。

「あ、雲雀さん！」

「沢田綱吉、夏休みはありがとう」

「いえいえ、こちらこそありがとうございました」

…何か仲良さげに喋ってる…。

…？ 何だ？

何か胸がチクチクする…。

ふと雲雀の「風紀」の腕章を見る。

ん？

安全ピンの所に何かぶら下がってる…？

あ、10代目と雲雀の会話が終わったみたいだな。

そして雲雀はオレの方に向かって歩いてくる。

雲雀とすれ違った。

その時、耳元で囁かれた。

「ストラップ、ありがとう」

雲雀の後ろ姿を見る。

腕章の安全ピンからぶら下がってるモノが見えた。

あ。

そこには

オレがあの時あげた、小さな紫色のペンギンが揺れていた。

「雲雀…」

キンコンカーンコン…

「あ、チャイム鳴っちゃった！！獄寺くん、走ろう！」

「あ、はい！」

あのストラップ、付けてくれたんだ…。

…ありがとな。雲雀。

また心が少し弾んだ。

第2章 戸惑い（後書き）

最初は短くなりましたね。

獄寺の心も少し変わったか？

まあ次からが始まりみたいなもんですから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2319w/>

雲と嵐～嵐視点～

2011年10月9日14時57分発行